

平和への願いをこめて
③戦後生活(関西)編
創価学会婦人平和委員会編

雑草のうた

まだ、たたかいは続いていた
食を求め、衣を求めて
ただひたすらに生きぬいた
悲哀の日々――

◀シリーズ▶平和への願いをこめて③
戦後生活(関西)編 雑草のうた

昭和五十六年十二月八日 初版第一刷発行

編 者 創価学会婦人平和委員会

発行人 栗生一郎

発行所 第三文明社

東京都千代田区猿樂町二十五四

電話(二九四)八七三二(代)

振替・東京 五一・一七八二三

印刷所 図書印刷株式会社

ISBN 4-476-07503-7

* 乱丁・落丁本はお取り替えいたします

Printed in Japan

平和への願いをこめて
③戦後生活(関西)編
創価学会婦人平和委員会編



雑草のうた



まえがき

人類の歴史は、戦いの歴史でありました。特に近世は、入り乱れる覇者と覇権の地図塗り替えの歴史であったといっても、過言ではありません。権力の渦巻くところ人間の欲望は果てしなく駆り立てられ、恐ろしい人類破壊への事業が着々と進められようとしています。

この「惨めなる人間の業」と「愚かな事業」からの解放のために、私達創価学会員は今日まで活動を進めてまいりました。私達婦人は、日蓮大聖人の仏法にめぐりあうことにより、何ものにもかえ難い一人の人間の「生命の尊厳」を身をもって実感し、感動の日々のなかで、妻として母として人間として、まず自己の変革から家庭へ、地域へ、そして人類の未来へと、平和社会建設へのうねりを着実に高めてまいりました。

そして、創価学会婦人部は平和への祈りと願いを、さらにもう一歩具体的に、身近なところから実現しゆくための活動を進めたいとの願望を込めて、昨年の暮れに婦人平和委員会を結成いたしました。

発足以来、①平和講座の開催 ②戦争体験証言集の出版を活動の柱としてまいりましたが、「婦人と平和を考える」講演会は、すでに回を重ねること東京で五回。またこのほか一回は、大阪に

おいても開かれ、京大名誉教授であり日本平和学会会長の田畑茂氏が、素朴な庶民の力を今こそ最大限に、有効に行使しゆくべきであると、講演をしてくださいました。

後者についての具体化が、当シリーズ「平和への願いをこめて」となりますが、第一巻の引揚げ編『あの星の下に』は発刊以来多くの反響を呼び、第二巻・従軍看護婦編『白衣を紅に染めて』、第三巻・戦後生活(関西)編『雑草のうた』を、ここに同時刊行の運びとなりました。このシリーズは、今後も地道に続けてまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

一、二巻では主に戦場の生々しさを再現し、同じ哀しみ、惨劇をくり返してはならないと訴えましたが、この仕事を通して私たちは、戦争の傷跡は戦場だけでなく、その後の庶民の生活に根強い亀裂を生じさせ、それは三十六年たった今日も癒えるどころか、世界一早い復興の陰で、街並みが美しくなればなるほど、ますます亀裂はゆがみ、大きくなっているのではないかということに気づきました。こんな思いを告発したいと第三巻の計画は練られました。

具体的には、第三巻・戦後生活(関西)編『雑草のうた』は、関西婦人平和委員会が、大阪を中心に、焼跡から闇市から、強いられた悲惨の中を、雑草のごとく生き抜こうとした庶民の体験を綴ったものです。そのバイタリティと知恵は、目を見はらせるものがある一方、あの極限を生きた人々の生命に深く鋭く刻み込まれた傷跡は、今も生々しく、権力の陰に泣かされた庶民のむごたらしさを、改めて痛感する思いです。

戦争を知らない世代の編集委員達は、この体験原稿にふれ「今私達は、何とひ弱になってしまったことか」と嘆いておりましたが、二度と再び、庶民のバイタリティが、強いられる悲惨を生き抜く手段とされないために、私達婦人はどうあればいいのか、という視点をしっかりと訴えてまいりたいと思います。

そうした点をふまえ、第三巻では作家の黒岩重吾氏、ジャーナリストの末次攝子さんらに、ご多忙のなか、貴重なご意見をいただきました。

このシリーズが、平和実現への意識をたかめる一火となり、戦争を知らない世代への語部となつて、この書にふれる人々を具体的行動へと導く一助ともなれば、これ以上の喜びはありません。今後共、読者の皆様の貴重なご意見や体験を、委員会宛に沢山お寄せいただけますよう、お願いいたします。

最後に、出版にあたり、執筆、編集にご尽力いただきました多くの同志の皆様に、心より御礼申しあげます。

昭和五十六年十二月八日

創価学会婦人平和委員会

委員長 秋山栄子

もくじ

まえがき

手記

船場にて……………	木村道子	11
ゼロの中での教育……………	河村俊子	17
米はダイヤモンド以上……………	山下喜代子	27
父を奪った八月……………	上原輝子	33
暗闇の時代……………	鍵清子	43
傘とよもぎ餅団子……………	小田切ハツ	49
大家族の食戦争……………	阿部トシ子	57
イカのカン詰……………	美濃部八千江	62
人生逆転劇……………	岡本美代子	67
タケノコ生活記……………	桜井美津	76
父を待つ歌……………	池田富美恵	81

金紗の羽織……………	館林キミ	88
体当たり人生……………	坂本ひな	97
「なーい」……………	山本富美子	106
浪曲師・芙蓉軒麗花……………	明石百代	112
少女二人の買出し……………	門野正子	118
戦中戦後の暮らし……………	植田喜久子	124
物々交換……………	中村アサエ	132
留置二十五日間……………	名倉はるみ	138
二十三歳の青春……………	星川淳子	145
オーバーをかじる……………	松本ツネ	151
塩炊きと米替え……………	竹元スミ	156
母の帰る汽車……………	山崎良子	163
買い出し行脚……………	坂ロシズエ	171
窮乏生活の思い出……………	森本澄子	179
失敗に終わった闇行商……………	中西タル	187

おばあちゃんの死

中山房子

192

飢えと知恵

玉田梅乃

200

ひた走りに生きぬいて

田原芳江

207

憧れの舞台

正木清子

213

《座談会》

焼け跡、闇市の“悲惨”を
二度と繰り返さないために

黒岩重吾／鎌田弘子
末次櫛子／松内早智子

219

《コラム》

米軍に接収された家々・国府満智子25／ひとかけのチョコレート・中村民江37／黒ぬりの教科書・丸山町子47／兵隊と掃除・大久保紀子61／いもどろぼう・馬野ソノ71／おにぎり・池田久子83／町役場の窓口から・渡辺定子93／“ララ物資”さまま・小野田玲子103／初冬の「別れ船」・柳町志げ119／預金封鎖・原山常135／歯止めの一粟・富岡と志149／帰ってきた甲子園・富永照子159／強制立ち退き跡・中村宗子175／宝塚と共に・中沢智子185／栄養失調の妊婦・岸本麻枝197／“軍港”舞鶴・土佐綾子205／PTA役員・渡辺留枝211

あとがき

編集後記

雑草のうた

平和への願いをこめて③戦後生活(関西)編

装幀・高久省三
表紙イラスト・前田 寛

船場にて

木村道子(56歳)
大阪市住吉区在住



◇何不自由ない船場の嬢はんが、敗戦を機にたくましく変身。ポツカリと穴のあいたような日々の中では、食べることだけが唯一の楽しみだった。二十一歳の娘ざかりで母を助け、大世帯を支えるための慣れぬ島仕事から台所仕事。そして五人姉妹の下着から洋服まで全部を手作り。戦火に消えた船場の老舗を懐かしみつつ、今も赤い服にあこがれるという。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝国ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ収拾セムト欲シ玆ニ忠良ナル爾臣民ニ告ク

朕ハ帝国政府ヲシテ米英支蘇四国ニ対シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ……………
爾臣民其レ克ク朕カ意ヲ体セヨ」

私は四角い古ぼけたラジオで、また新聞により終戦を知った時、日本の敗けた無念さも何もなく、ただもう、今日からは空襲がないという安堵感のみでした。

前日十四日の午前十時頃より、二時間近くにわたってB 29十五機、P 47、P 38合わせて八十機が大阪の上空に来襲し、やっと退去してやれやれと思ったのも二、三十分。また十二時半頃より、B 29百機の編隊が紀伊水道方面より侵入。十機内外の編隊を以て波状来襲し、市内に爆弾を投下して相当な被害を与えていったのでした。

昼も夜も毎日毎日空襲の日々でしたので、今日明日がどうなるかわからないという恐怖感からの解放、それは嬉しいとか喜びとかいうものではありません。防空壕に入ったり出たり生活がなくなり、今日からは何をしたらいいのか、一日ポカンとして何を考えることも出来ませんでした。

当時私の家庭は、祖母、両親、四人の妹、第一人、使用人五人の大家族で、その上空襲で焼け出された親族とか知人とかが毎日必ず何人か宿泊するので、食事のまかないが大変でした。でも家は広く、庭も七百坪ほどありましたので、大阪市内といっても、いろんな野菜を作り、ほとんど自給自足していました。作り方もわからないまま畠仕事はしなくてはならないし、食べざかりの妹達のために朝昼晩の食事はもちろんのこと、おやつも作らねばならず、ほとんど一日中台所仕事をし、夜は夜で、石うすで粉をひき、一升ビンにお米を入れ棒で米つきをおそくまでしました。当時は、お菓子屋さんは全部お店を閉めていました。キャラメルの一つも、チョコレートの一

つもパンの一つも何にも売っていないのです。主食は配給ですが、それもお米のみでなく、大豆とか、ナンバ粉がずい分まざってくるのです。そして、たまに魚が少々。ヤミ買をしてはいけないといわれても、正直に配給物だけでは栄養失調になってしまいます。農家へ買出しに行ってもお金では売ってもらえず、焼け残った僅かの衣類で物々交換してもらって食をつないでいました。私の親友は、病み細ったお母さんに、せめて白いお米のおかゆを食べさせたいと、たった一枚の晴着をお米とかえてもらっての帰り、車中にてその筋にとがめられ、没収されてしまったのです。私は、「もごもごするナンバ粉はいや、大豆はいや」という育ち盛りの妹達に食べさせるため、毎日毎日いろいろと工夫をこらさねばなりません。南瓜をゆがいてつぶし、サッカリンをいれて甘味をつけ、妹達の喜びそうな型にしたり、ナンバ粉をまるめて焼いたり、油が手に入った時には、ドーナツにしたり、大豆をいり、お米より大豆の方が目立つ豆御飯にしたり。当時どこの家庭でも一番よく食べたのは、すいとんでした。それも小麦粉をねって団子にして湯に浮かし、醬油で味をつけるだけ。またさつまいもの茎（スダネ）を干して野菜代りに煮て食べたり。今から思えば、犬も食べないような食物ですが、それでも空腹のない毎日は、空腹さえ満たせば、何の不満も感じませんでした。

母は大世界の家族の食事をまかなうため、配給米や、ヤミ屋さん、かつぎ屋さんに分けてもらった大事な食糧に虫がつかないよう、入れたり出したり、蔭干しにしたりしていました。皆、何

の希望も目標もなく、その日その日の食べることにのみ精出していたようなものでした。

終戦を迎えた時、私は二十一歳の娘ざかり。そして、私を頭に妹達も十九歳、十八歳……とつづき、母としては娘たちに着飾らせたい思いで一杯だったと思います。やっと防空頭布やモンベから解放されましたが衣料も切符制で何にも売っていません。母は、大事に疎開してもちつづけた布地を次々と出してきては五人の娘たちに着せようとし、私は五人分のワンピースやスカートを縫うのに大変で、その上シミーズとか下着類も全部縫うのです。長い間着られなかったデザインでと、フリルをつけたリギャザーをつけたリ、そして布さえ見ればつぎたしたりアップリケをつけたリして作ったものでした。

また久しぶりに和服も着ることが出来るようになりました。戦争中は、ちょっと派手な色を着ても非国民扱いをされるので、紺のモンベのみでした。先日女学校の同窓会で話し合ったことですが、私達の青春時代は、ああいう風だったので、その反動でしょうか、年をとった今になって、みな赤いものを着たがる気持があるようです。

その内に米国の進駐軍兵士が大阪にも進駐し、はっきりおぼえておりませんが、何か歓迎のパティーのようなことが催され、私達も振り袖の着物を着て行かねばならなくなり、こわごわ出席しました。そしてちょっとニコツとされても恐しく身ぶるいがし、それから外出の時は和服を着ないことにしたものでした。

また戦争中は歌をうたうにも軍歌以外は許されない雰囲気で、私は幼稚園の時からピアノを習っていましたが、ピアノの先生も出征され、その次に師事した先生も戦死され、もうお稽古をする気にもなりませんでした。それでも軍歌「愛国行進曲」とか「若鷲の歌」、「愛国の花」とか「あゝ紅に血は燃ゆる」とかを愛唱したものでした。

終戦を迎えるや、西條八十、サトウハチロー、菊田一夫、佐伯孝夫氏等が次々と作詞、古賀政男、服部良一、万城目正氏等々による作曲により、多くのかろやかな歌が巷に口ずさまれるようになりました。私の記憶では、昭和二十一年には「リンゴのうた」「東京の花売り娘」、二十二年には「港が見える丘」「山小舎の灯」、二十三年には「憧れのハワイ航路」「東京の屋根の下」「異国の丘」「君待てども」「君忘れじのブルース」「フランチェスカの鐘」「東京ブギウギ」、二十四年には「バラを召しませ」「青い山脈」、「銀座カンカン娘」等々が流行し、何一つうるおいのない青春にやっと歌だけは自由に歌えるようになりました。

でも食糧事情だけはなかなか人間らしい生活にはなりませんでした。たまに、白いコッペパンの配給があれば、皆、長い間かかって楽しんで食べたものでした。そしてどこへ行くにも「お米御持参」でなければなりません。ところが、真つ昼間にヤミ市が開かれ、ここでは何を売ってもとがめられず、全く矛盾だらけでした。それから、面白いことは、パーマメントをかければ、戦争中は「パーマメントに火がついて」と歌にまで歌って非国民よばわりされていましたが、戦後